医学館の学問形成（三）

幕末考証学の位相

町　泉寿郎

日本医史学雑誌第四十六巻第一号　平成十年　九月　九日受付
平成十二年三月二十日発行　平成十年十一月十六日受理

一　幕末江戸の都市文化

さきに『よしの冊子』を引いて検証したごとく、天明・寛政の時点で早くも折衷学者の不品行は顕著であった。安永・天明期に江戸で幕府の蔵米を取り扱った札差たちの豪奢な風俗として知られる「十八大通」ばりの当世風を、官医山崎宗運が身につけていたという事態がこれをよく象徴している。これに続く幕末の森枳園らの考証学者の不品行もまた周知のことであり、いわば不品行は折衷・考証学者の特徴ともいえるのであるが、ではそれは何故そうなのであろうか。

十八大通は江戸の後期の風俗をリードした富商の代表的存在であるが、彼らが上方の豪商と全く異なっている点は商業基盤を幕藩制自体に依存していることである。上方商人が都市周辺の農村まで巻きこんだ貨幣流通経済圏を成立させ、土地と人民の直接支配を基本とする幕藩体制の根幹を浸食する存在であるのに比べて、江戸の札差たちは年貢徴収を財政基盤とする幕藩体制の傘下において商業活動を営み得る存在であった。それ故、彼らの生み出した風俗・文化も、幕府政治の庇護のもとで安定した社会を謳歌するといった趣きのものとならざるを得ないのである。

狩谷棭斎が婿養子に入った津軽屋も、弘前藩の蔵米を取り扱う大きな米問屋であり、棭斎の学問が潤沢な資金を背景

として成立したことも周知の事実である。彼ら考証学者が、勤勉に学問をなしたことは紛れもない事実だが、それは決して清貧といった環境から生み出されたものではなく、概ね豊かな財力に恵まれ、かつ時流の洗練から退廃へとむかう江戸風俗とも緊密な交渉をもった人物たちによって生み出されていることは注目に値するのではないだろうか。

彼らの学問の背景となった江戸の都市文化の一端を、以下具体的にみてゆきたい。まず渋江抽斎の森枳園宛ての書簡[1]を掲げよう。

一、五月廿五日・七月四日両度之貴墨、九月二日相達、拝見仕候。其
皆々様被為揃、愈御安寧、奉恭慶候。小子無異、乍憚御安慮可被下候。
雪堂出府、睡魔ニ被誘、刀を落したるハ、今に始めぬ事ながら笑止ト云べし。
榛軒先生室、着帯、大慶不過之奉存候。
説文注御出情、御羨敷奉遠察候。
愚紙一件、酸鼻之事共有之趣、困入候儀、御同意奉存候。
京水先生、兎角歯痛之由。乍然、素問注之手際、乍例驚候事。
三弦御出精、河東抔御学之由、大慶〳〵、しかし長くハ続かぬ儀ト奉察候。
劇談種々為御知、奉謝候。梅幸・訥升争論、奇談也。
鵺之話ハ大奇と云べし。
大頭温、芝居起于孟子之説、キツイ学古流ノ話也。
説文注を読ノ詩、及述懐之句、秀逸と感候。
天師堂簑詰、廉なるもの也。先生之悦喜可察候。
道瑛、宜申上度申聞候。

説文注、予も懶惰ながら読て漸四篇下に至る。筆録、入
尊覧候。御加筆奉希候。尊考中、髆肩甲也ノ段説、可笑之
癖（ヘキ）説之由、詳に御示教被下度候。骺字注もれなる由、同断奉希候。
體字ノ御説ハ感入候。胚・胎、千金ト合スルハ甚佳。五蔵ノ説、熟考之上
進上可申上候。肙字注ハ、段意蜎々ト子子ト同物トシタル也。貴考ハ
按井中子子句虫之至小者也ト云所ヲ、御読違欤と奉存候。御熟考可被下候。
大和やお常伝言、委細敬諾、尚又宜。
此地に居候てハ会読等ノ張合無之故、トカク懶惰ニなり、読書ハ雑書
稗史をのミ好候。しかし夫も此地にハ一向払底、困入候。導引の書を
得候様仰ニ候へ共、是ハ導引体要ト申俗書を借読いたし候のミに候。
一向つまらず、此節ハ琅邪代酔篇を借読いたし候。五雑組様
ノ俗書、面白き事も少ハあり。帰府も早くなり候様ニも先頃ハ
申候処、此節ノ体ハ中々左様にハ無之、明年も多分ハ秋ニ至リ
可申と存候。
一医生所蔵ノ薬籠ニ左ノ文有之、造語なるや古語なるや、御考奉願候。
芳寒橘井　一瀝延生
紅潤吉園　寸圭起廃
丹波元簡廉夫
紙書切候ニ付、書外後便可申上候。九月七日認置

この書簡には差出人・受取人の名を欠くが、付簽一葉があり、森枳園の自筆で「渋江道純　自津軽之手簡二通」と記されている。これによって渋江抽斎が藩侯に従って弘前に赴任中に、江戸の森枳園に宛てた書簡とわかるのである。森鷗外『渋江抽斎』に徴するに、この弘前行きは天保四年四月六日に江戸を発し、翌年十一月十五日に還った、初度のそれである。書中に抽斎の痘科の師池田京水（天保七年十一月十四日没）の健在を言うことから、かく同定できる。

書簡の内容は、伊沢榛軒の妻の懐胎や池田京水の近況、江戸歌舞伎の風聞、小島学古（宝素）のこと、枳園の音曲稽古のことなど、枳園からの便りにあった身辺雑事に応じた部分もあるが、段玉裁『説文解学注』をめぐっての応酬がかなりの部分を占めている。枳園から段注の「髆」「骼」「體」「月」の説に関する見解や「胚胎」「五蔵」の説を寄せられたのに対して、「髆」「骼」については改めて詳説を求め、「體」には賛同を示し、『説文』の「胚」「胎」字の解が『千金方』と合致するのは「甚だ佳なり」とする。「五蔵」の説については更に熟考の上、返答するといい、「月」については枳園の段注誤読を指摘する。

江戸にいる枳園はこの年二十七歳で、先師蘭軒が文政十二年に没してからは、狩谷棭斎宅に月に三度通って小学の研究をしたという[2]。棭斎はこの二年後天保六年に六十一歳で没しているから、この書簡は丁度、枳園が棭斎に従学していた時期にあたっている。二歳年長の抽斎が棭斎に従学したのもこの前後とみていい。抽斎は、師友と離れながらも、『説文解字注』を弘前まで携行しており、熟読して四篇下に到った。読書時の筆録を手紙に付して枳園に郵致してきている。つまり書簡の文面に棭斎の名は表われないが、ここで両者が『説文』段注をめぐって研鑽の成果を披瀝し合っている事態は、単に好学の同臭の意見交換として見るべきではなく、清朝で発達した小学研究の成果を、日本において最初に導入して研究に生かした人物である棭斎がすでに晩年をむかえつつある時期に、棭斎の誘掖を受けた逸材二人が驥尾に付すべく切磋しているという構図として見る必要があるのである。

抽斎が、弘前の地に共に読書しうる学友なく、興味をそそる書籍もないことを歎じているのは、彼らの学問が時流と

同じくないことを考えれば当然のことだが、注目される。清学が最高潮を迎えた乾隆・嘉慶の時期の新刊本を、輸入直後に大金を以て購うことは、幕府枢要部の人々か、もしくは江戸の富裕者にのみ可能なことであった。幕末期、上方はこの点においてすでに江戸と匹敵し得なかった。且つ当然書籍購入には購入者の嗜好が反映するから、結局、清の最先端の学問の成果は、多紀氏や狩谷棭斎らの収蔵に帰したのである。加えて、彼らは日本にのみ伝存する佚存書の価値を認識し、資料を博捜収集していた。この意味で、抽斎らの学的環境は、時間的、空間的に特殊に恵まれたものであったのであり、それは弘前には求むべくもないものであった。

新渡の清朝の高度な学術書や、数百年を経た貴重な古籍は望むべくもないとしても、抽斎の娯楽を満足させる「雑書・稗史」の類いも弘前にはなかった。先には『導引体要』（林元旦著、喜多村利旦編、慶安元年成、正徳三年刊、一冊）という書物を借読した。「導引」は『荘子』刻意篇、『淮南子』精神訓、『史記』亀策列伝等に記載の見られる、中国古代から行われた養生を目的とした体操法のことであり、抽斎の念頭にはこれら史・子の古文献の記載や、伝説の名医華佗の「五禽の術」などがあったはずである。しかし古文献とは全く縁のない通俗的な内容に見事期待は裏切られ、今は明・張鼎思編の随筆『琅邪代酔編』を読んでいるという。

江戸と地方との情報量の落差という視点では、駿河の説文学者として知られる山梨稲川のことが思い起こされる。友人松崎慊堂は稲川の墓碑銘に「駿雖名府、乏典籍、稲川又貧無力致異書。文緯之説、鋟剞冥索、皆出於自得之精、而与近日舶載江戴銭段之言往往暗合、又有出其表（駿は名府といへども典籍に乏し。稲川又た貧にして異書を致すに力なし。文緯の説、鋟剞冥索して、皆自得の精に出で、近日舶載の江・戴・銭・段の言と往々に暗合し又た其の表に出づる有り）」と言っている。文政五年末に稲川から棭斎に送られた難解文字二十八字の字音・字体の質疑と、それに対する棭斎の回答[3]を見ても、棭斎の説が銭大昕の『潜研堂文集』、銭坫の『説文斠詮』などの清朝学者の説を引き、また『嘯堂集古録』『鍾鼎款識』などの清刊の金石資料を参看し、加えて宇治河崖の古碑涅槃経の用字例まで引いて精到を極めているのに対し、稲川の

方は清学からの引用は全く見られず、「鐘鼎款識ナド云書考合セマホシキモノ也」などという語も見えていて、資料面での不足は覆うべくもない。小学研究に必須のそれらの文献を欠きつつも、顧炎武の古書十部説などのかぎられた情報を参考にして、古書の自力での熟読精思によって、今日もなお優れた業績と評価される『文緯』『古声譜』『考声徴』『諧声図』等の著作をなしとげた稲川の独創の才は、高く評価されるべきものである。しかしいかに天才を有していても、十分な工具書や比校すべき資料が欠乏していては、古文献の実証的な研究は十分な成果をあげ得ないことも、椀斎と稲川の質疑・応答はよく物語っているのである。

次に彼らが愛好した芝居その他の娯楽に関して一瞥したい。

（前半省略）

東叡山彼岸桜真盛、貴
賤羣聚夥御座候。
宝生太夫勧進能大入、六日ニ
初日、十六ニ、二日目、下旬ハ火
事ニ而見合セ、来月ヨリ興行致候。
芝居ハ一丁目中村歌右、嶌ノ
景清大当リ大入。二丁目八代目
ケゾリ九右衛門中入。三丁目訥子
男重ノ井評宜ク不入ニ御座候。
三月狂言、二三ハ鏡山と申事、
或ハ二丁目名護屋とも申、三丁目

ハ其儘ヲクト申ス事、諸説紛々。
尚御出入御免被為在候ハ、
早速御通達、直御出府之積ニ
奉承知候。其前、格別御病
用御繁劇ニ無之候ハ、一寸
手軽ルニ江戸之花御覧ニてハ
如何。ドウデモヨロシク。
文魁堂之真書三管、年玉ニ
来候。小張一冊令郎ニ進上仕度候。
筆ヲ執テ居トイツマデモクダラヌコト
ヲカキソロ。ヨイカゲンニ是ニテ筆ヲ
留候。目出度、賢。恐々不尽
二月廿九日　伊沢信重
森立之様
（上書）
町田玄斎様　伊沢磐安

これは嘉永元年二月二十九日に、伊沢蘭軒の次男柏軒（名信重、通称磐安）から森枳園に宛てて出された書簡[4]の後半部分である。この年柏軒三十九歳、枳園四十二歳。共に祖父の代から福山藩医となった家に生まれている。しかし枳園は、書簡中に「御出入御免」云々とあるごとく、天保八年二月に不行跡を咎められて藩禄を失って以来、相州各地を流浪す

ることすでに十二年目を迎えていた。上書きに見える「町田玄斎」は、流謫中に使用した変名であり、祖先「町田市兵衛」「町田家玄」に由来する姓である。

伊沢兄弟や小島成斎ら同藩の知友が枳園の帰参のために斡旋の労をとり、この時期医学館で計画されていた『千金要方』校刻事業に枳園を参加させることを規模に、ようやく藩邸御出入許可の見通しにまでこぎつけていたのである。枳園失禄の原因は芝居熱が昂じて自ら舞台に立ったためである（渋江保『森枳園伝』）ともされるが、この書簡を見るかぎり枳園にも柏軒にも前非を悔いる様子など全く見られない。時代は水野忠邦の天保の改革が瓦解した後、黒船来航と共に尊王攘夷の喧騒の中で世相が流動化するまでの狭間にあたる。時の老中首班は福山藩主阿部正弘である。天保の改革の背景には、アヘン戦争における清国惨敗の情報が惹起した外圧に対する危機意識があるのであり、いずれにしろ天保以降の世相を規定しているものは、欧米からの圧倒的な外圧であった。幕末の江戸に生きた人物がこうした社会状況と無縁であったとは考えられないが、意識の上において「儒」でなく「士」でもない彼ら考証医家には、社会への積極的な働きかけは決してみられない。[5] 江戸の状況として柏軒が伝えてきているものは、福山藩邸を類焼して藩医で友人の岡西玄亭・津山成器らが焼け出された火事のことであり、幕初に林羅山が忍ヶ岡の別邸に植えた桜に端を発し江戸を守る法城として京都比叡山に倣って上品に整備された東叡山の桜のことであり、十二代将軍家慶の指南役を勤めて人気実力ともに当時随一の宝生太夫友于が開催した勧進能のことであり、そして最も愛好して止まぬ芝居のことであった。趣味嗜好、友人の近況など、身のまわりのでき事に終始する。

江戸時代最後の勧進能となったこの時の演能記録はかなり詳細に残っている。[6] 興味深いのは、この二月六日の初日から五月十三日の第十五日に及ぶ演能を、渋江抽斎が五日目と六日目を除く十三日間、番組を片手に熱心に見物していたことである。抽斎は火事や雨天に妨げられて度々順延になる演能日や、急に立てられた代役まで、所演にしたがって番組に朱筆で注記していた。[7] 習い性となった校勘学者の生態を見る思いがする。

芝居は天保の改革期に、幕初以来、官許の江戸三座が、場末の浅草聖天町に移転させられ、市川海老蔵（七世団十郎）が奢侈贅沢を咎められて江戸を追放され、江戸歌舞伎は甚大な打撃を蒙った。しかし弘化から嘉永に移るこの頃になると江戸で海老蔵の留守を守った八代目団十郎が、幕末随一の美男役者に成長して、その欠を埋め始めていた。柏軒の伝えている「一丁目中村哥右、嶌の景清大当り大入」は、猿若町（天保十三年七月より聖天町から改称）一丁目の中村座の正月興行（七日初日）で、当時実力随一の四世中村歌右衛門所演の日向嶋の景清のことである。「二丁目八代目ケゾリ九右衛門」は、猿若町二丁目市村座の十一日初日の興行で、八代目団十郎が近松の『博多小女郎波枕』に取材した『三升独鈷博多襠』で毛剃九右衛門を演じたことを言っている。毛剃は父七代目が得意とした役であった。「三丁目訥子男重ノ井」は、猿若町三丁目河原崎座が、曽我狂言と重の井子別れを綯り交ぜにした『吉例曽我訥子玉』（二世河竹新七脚本）で二十四日に初日を開け、訥子こと五世沢村宗十郎が重の井を武士に替えた伊達新左衛門を勤めたことを言う。

七代目団十郎を枳園や抽斎が最も贔屓としたことは、鷗外が書いたのでよく知られているが、五世沢村宗十郎もまた彼らが七代目や大太夫五世半四郎と並んで讃辞を惜しまなかった役者であった。抽斎の和文随筆『衒言』[8]に次のような一節がある。

大弁若レ訥、聖人為レ腹不レ為レ目、の二語をして（ママ）、今世俳優訥升の腹を主とし技を標（すゑ）とするは、老聃の意を得たる者と知べし。

「天保辛卯季秋抽斎酔醨中ニ衒語す」という識語によれば、天保二年二十七歳の時の酔余の戯言ではあるが、『老子』「洪徳」「倹欲」からの引用には学者の遊びの気分があるにせよ、宗十郎への熱烈な讃辞にいつわりはないのである。

「腹を主とし技を標とする」（視覚的に派手な演技よりも肚で演じてゆく）芝居をよしとする価値観は、枳園にも共通するものであった。渋江保が枳園に従って採薬に行ったときのことである。枳園は七代目の民谷伊右衛門と三代目菊五郎のお岩と小仏小平の早替りで「四谷怪談」の戸板返しの場を演じてみせた。保が「そんな旧い役者ばかりしてみせずに、

今の俳優の真似をして見せて下さい」[9]とせがむと、枳園は首を振って、「今の役者ハ駄目だ。ナニ小団次か、小団次ハ最も悪るい。阿爺さん（抽斎）ハ、西洋だといってお嫌ひなすったぜ。今の役者で可いのは訥升（後の助高屋高助）ばかりだ。訥升の判官（塩冶判官）ハ可い。訥升を除けて、未だ〳〵紫若（後の八代目半四郎）が可い。跡の役者ハ見るニ堪へん」[9]と言った。保が紫若の政岡の演技を揶揄して「笑ひ政岡」だというと、枳園は真面目になって、「その政岡の泣くことの出来ない所に無量の味があるではないか。田之助や坂彦の政岡を見なさい、アレが真個の乞児芝居といふのだ」[9]と応じたという。

これに加えて、江戸時代後期、江戸三座での観劇は、費用も高く（一般庶民向けの娯楽であった寄席の約百倍）、日中に上演（寄席は夜も開いていた）されることもあって、とても庶民の娯楽といえるようなものではなかったことも注意しておきたい。芝居はむしろ土地持ち、家持ちの富裕な中上層町人向けの娯楽であり、狩谷棭斎はもとより、抽斎や枳園もこの階層に近いのである。彼らの娯楽は、今日の古典芸能鑑賞のごとき取り澄ましたものではなく、むしろ卑俗なものと言ってもよいのだが、彼らがそれに興ずる姿勢はなぐさみという以上に、深く淫するものであったことは指摘したい。

二　思弁と考証

言うまでもないが、彼らの関心は思弁にはなく考証にあった。鷗外は抽斎が「終に儒、道、釈の三教の帰一に到着した」といい、「若し此人が旧新約書を読んだなら、或は其中にも契合点を見出だして、彼の安井息軒の辨妄などと全く趣を殊にした書を著したかも知れない」（『渋江抽斎』その五十八）という観測をしているが、果たしてどうであろうか。抽斎の『老子』と『論語』の並称が師迷庵の説に基くことは既に鷗外が指摘しているが、迷庵の所説を聞けば次のごとくである。

天ハ蒼々トシテ上ニアリ、人ハ両間ニ生レテ性皆相近シ習相遠ナリ。世ノ始ヨリ性無キノ人ナシ習ナキノ俗ナシ、

世界万国ミナ其国々ノ習アリテ同カラズ。其習ハ本性ノ如ク人ニシミ附テ離レズ。老子ハ自然ト説ク其是欤。孔子曰述而不作、信而好古、竊此我於老彭鄭氏注曰老聃彭祖ナリ、カクノタマフトキハ孔子ノ意モ亦自然ニ相近シ。然レドモ孔子ハ尭舜三代ノ道ヲ述テ其流儀ヲ立玉ヘリ、尭舜ヨリ以下ヲ取レルハソノ事ノ明カニ伝ル所ナレバナリ。[10]

この老子理解は実は荻生徂徠に淵源していると思う。まず天・性の解釈では『辨名』に「天不待解、人所皆知也。望之蒼蒼然、冥冥乎不可得而測之」とあり、「孔子曰、性相近也、習相遠也。本勧学之言、而非論性者焉」とあり、共に『荘子』逍遙遊、『論語』陽貨の古言を典拠とするものであり、徂徠の造語を迷庵が引いたわけではないけれども、朱子学的な天・性解釈とは全く異なるものであることは確かである。老子に関しては、『学則』第三則に次のように言う。

数車無車、而有車之名、古之道也、非聃言之失也。道可道、非常之道、聃言之失也。夫自聖人而有道之名。聃豈非邪。祗其知非及聖人、教之無術也。務求喩之、不竢乎生、乃舎物而言其名。（車を数へて車なし、しかも車の名あり。古の道なり、聃が言の失せるにあらざるなり。道の道とすべきは常の道にあらず。聃が言の失なり。それ聖人よりして道の名あり。聃あに非ならんや。ただ其の知、聖人に及ばず、乃ち教えの術なき務めてこれを喩さんことを求め、生ずるを竢たず、物を舎ててその名を言ふ。）（中略）後儒乃非聃、而傚其尤、言之弗已、名存而物亡。仁義道徳之説盛、而道益不明。（後儒乃ち聃を非として其の尤に傚ふものなり。これを言ひて已まず。名存して物亡ぶ。仁義道徳の説盛にして道ますます明らかならず。[11]）

徂徠によれば、道は天地自然のものではなく、古代中国の聖人が制作した秩序創出のための具体的施策（礼楽）の謂で、それ故人為よりも自然を重視する老子にあっては、聖人の制作にかかる礼楽刑政などは、歴史的に変遷するものであり、とても常の道と言えるものではないことになる。しかし、聖人は秩序を直喩的に説かずに、それを習得することによっておのずから実現できる具体的な条件をもって人々に施すことの有効性をよく知っていたのであるが、老子はそのことを理解せず、聖人の制作にかかる具体的条件を捨てて、聖人制作の原理をこそ真の常道であると考えて、それを説こう

とした。そのため、議論が益々盛行し、道の実体は益々不明諒になったというのである。

『学則』の文章は余りに修辞に意を用いすぎて、飛躍が多く難解だが、研究ノートとされる『菱園十筆』「七筆」では、より詳しく次のように言っている。

老子独超然、有以見於礼楽之源。然生不遭聖王時、無所用其才。故為書以詔後世、然是迺王者之事也。故難言之。是以艱奥其文、如隠語然。是老子意也。（老子独り超然として以て礼楽の源に見るあり。然れども生、聖王の時に遭はず、其の才を用ふるところなし。故に書を為りて以て後世に詔ぐ。然らば是れ迺ち王者の事なり。故にこれを言ふことを難んず。是を以て其の文を艱奥にし、隠語のごとく然り。是れ老子の意なり。）

常有者、三皇五帝三王之所皆有也。常無者、三皇五帝三王之所皆無也。其徼者、三皇五帝三王之道、皦然可見者也。謂礼楽刑政之属。其妙者、三皇五帝三王之道、眇然難見者也。謂仁義道徳之属。老子之意、欲知常道者、当以三皇五帝三王所皆有者、観其皦然者、以三皇五帝三王所皆無者、観其眇然者、則其常者非常者、可得見已。蓋耕而食、織而衣、相生相養、相聚相群。是三皇五帝三王之所皆有者。而其它礼楽刑政、種種之迹、或有或無也。仁義道徳之名、或有或無。而先生所以立仁義道徳之本、不可得見焉。然必有之矣。（常有なるものは、三皇五帝三王の皆あるところなり。常無なるものは、三皇五帝三王の皆なきところなり。其の徼なる者は、三皇五帝三王の道の、皦然として見るべきものなり。礼楽刑政の属を謂ふ。其の妙なるものは、三皇五帝三王の道の、眇然として見難きものなり。仁義道徳の属を謂ふ。老子の意は、常道を知らんと欲せば、まさに三皇五帝三王の皆あるところのものを以て其の皦然たるものを観、三皇五帝三王の皆なきところのものを以て其の眇然たるものを観れば、則ち其の常者・非常者、得て見るべきのみ。けだし耕して食らひ、織りて衣、相生じ相養ひ、楽聚り相群す。是れ三皇五帝三王の皆あるところのものにして、其の它礼楽刑政、種々の迹は或は有り或は無きなり。仁義道徳の名或は有り或は無くして、先王の仁義道徳を立つるゆゑんの本は、見ることを得べからず。然れ

ども必づこれ有らん。[12]）

徂徠の『老子』解釈は、右のごとく「王事」を説いたものであり、先王の礼楽制作の「源」を明らかにしようとしたものであるという大へん独創的なものであるが、こうした解釈が徂徠自身がその「源」を模索しようと思考を重ねた結果の産物であることは、右の文章からもよく感じ取れるであろう。結局、儒者である徂徠は、孔子を祖述する者であり、文献の徴するに足る範囲に言説を限定するという立場を取るのであるが、その一方で実証的に文献に徴しても到達できないような、道の始原をめぐるこのような思索に多言が費されており、ここに徂徠学の本色を見る。

迷庵や抽斎にこの種の言説を見出すことは難しい。彼らが『老子』と『論語』、或は仏教までを加えて、教説の一致を見出しているのは、こうした思想問題に本来関心がなかったからである。徂徠が古典を曲解してまで自己の思考を展開したのに対し、彼らは思弁に煩わされないためにごく大まかに諸思想の共通項を見出して思想問題を脇にやり、文献の実証のみに専心する道を択んだのである。

三　学問の位相

桉斎、抽斎、枳園らの旧蔵書は既に四散湮滅し、且つ蔵書目録にも完全なものが残っていないために、今日その全容を窺うことは難しいが、抽斎と枳園に限って言うならば、彼らの蔵書の特徴は、本領とした考証学のための古籍資料、目録類、工具書のほかに、江戸風俗に密着した軟文芸が大量に含まれていたことであろう。明治十八年十二月六日に枳園が没した時、嗣子椹庭に既に亡く、椹庭の妻陽の生家である大槻家（磐渓の子、如電・文彦兄弟）に引きとられた蔵書が、「硬軟両方面に亙り」「二台の車に満載する程あった」[13]こと。また国会図書館所蔵の抽斎旧蔵書に、黄表紙や浄瑠璃が含まれることからも、このことはよく窺える。

稗史小説の流行が仁斎学派に源を発することは近世文学史の定説であり、東涯・梅宇兄弟が西鶴を評価したことも知

られている。しかし古学派の場合、実体はともかくも、白話小説や俗文芸を嗜むのは、人倫日用の道を闡明にするという経学上の問題意識があり、その道と密接不可分と考えられた「人情」に通暁する必要性という大義名分があったからである。

歌舞音曲の嗜みについてみても、菱園一門が笙・篳篥などを実習し雅楽を愛好したことはよく知られているが、これも高踏的娯楽の側面を全く否定はしないけれども、徂徠にとっては中国ですでに滅びた古代聖人の楽が、唐代にわが国の奈良朝に伝わってより伝承の正しい雅楽にこそ遺っていると考えたからに他ならない。詩文制作における古文辞提唱、訓読を否定した華音の実習など、徂徠の行った多面的な学業は、後世にさまざまな影響を及ぼすことになったが、徂徠個人の中ではそれらはすべて先王・聖人の道を追体験し闡明にするという経学上の問題意識に収約されるものであった。

これに対して、抽斎や枳園が俗曲を嗜み、芝居を熱愛し、俗文芸に通じることと、彼らの考証学との間には、古学派にみられた内的な関連は見られない。彼ら考証学者は純粋に各自の好尚に従った娯楽としてそれらに興じているのである。この相違は、「道」の闡明を目的とする仁斎学や徂徠学の古学と、幕末の考証学との学問の性格を端的に示している。

古学派では個々の事象に関する実証的な態度を指向しつつも、それが総体として何を意味するかという高次の統合に絶えず注意がはらわれている。徂徠は「道者統名也」（『辨名』道一則）と言った。しかしこの言葉は「道」の構成要素である個々の「名」の、一つ一つの累積によって帰納的に「道」が構成されているということを言っているのではない。そうした分析的方法は古学派のものではなく、まず全体に対する直観的把握があって、その全体像の下で個々の事象が規定されてゆくのである（「先生之道者、立其大者而小者自至焉。（中略）銖銖而称之、至石必差。寸寸而度之、至丈必過」。『辨道』十一則）。日野竜夫の言う、実証という名の下の「偽証」[14]が発生するゆえんである。

芝居といえば、折衷学者の山本北山が愛好したこともよく知られている。[15]折衷学は、徂徠学を経て、儒学が政治的実現を中心的課題とする学問であると認識されるようになった時代の儒学である。徂徠学では非実証的側面はあるとして

も、聖人の治績（六経）を規範として現実社会の再構築が模索されていたのであるが、山本北山ら折衷学者の場合には現実社会の改善という命題のもとに経学が援用され、社会的有用性によって経学が規定される方向を持つ。ということは、政治的実現という儒者としての任務を果たしさえすれば、あとは何に興じようと儒者たることを少しも妨げないという理論的根拠も生ずるのである。これは折衷学と鋭く対立したように見える朱子学正学派においても、時務に有用である故に朱子学を奉ずるという、儒学の政治への合目的性において共通するものであった。しかも北山の場合、期待した任官が叶わず、小普請組に終始して、家禄一五〇俵程度の軽輩ながらそれ以外の収入によってある程度家産に恵まれるという条件は、生活環境の点で中上層町人階級にむしろ近似するものであった。このことは、北山や市河寛斎が首唱し、大窪詩仏や柏木如亭が後に続いた日常的な風景や感興を平淡に叙情する宋詩派が、町人層の幅広い支持を得たことがよく証明している。

まして幕末の考証学者たちは、弘前藩医渋江抽斎・福山藩医森枳園、その師の質商市野迷庵・米問屋狩谷棭斎らにみてとれるごとく、社会改革を担当する権利も義務もなかった人物たちだったのである。それゆえに彼らは、広汎な文献的事実に立脚しつつ帰納的に真実を導き出すという純粋な学的追究の道を悠々と歩むことができたのである。市野迷庵に次の言葉がある。

荀子云前王之道今王是也、コレハ今王ノ御定法ニヨレト言コトナルベシ。今王ニテヨクバ儒者ガ先王ノ道ハ説クニハ不及ト云モノ、トマレカクマレ唯儒者ハ先王ノ道ヲ説カネバナラヌナリ。孔子モ堯舜三代ノ道ヲ弘メントテ世ニハ用ラレズ苦労ナシ給ヘリ。[10]

また「今儒者ノ道ハ繁冗ニシテ行レヌモノト知ルベシ」とも言っている。実現不可能と知りながら儒者である限り、義理や道を説かねばならぬとは御苦労なことだと言わんばかりである。彼らにとって学問は、自己の嗜好に従ってなせばよく、その結果が真実かどうかだけが問題なのであり、学問の有効性に基く価値の高低の問題は全く埒外に置かれて

いた。

枳園は、椏斎の日常の倹約ぶりが窺える次のような逸話を伝えている。椏斎にとって、学問が生活の中で占める位置が、次の一文によってよく理解されよう。

狩谷ノ先代三右衛門（父養）ハ超花亭ト号シテ千家ノ茶ノ湯ノ奥義ヲ究メタル人ナリ。サレバ茶器モ伝来ノ名物アリ。椏翁モ箕裘ノ業ヲ継ギ、三八ノ日ハ釜日トテ友人集会シ茶事アリ。或時語次茶ノコトニ及ビ、弊藩ノ皆川立庵ナド茶ノ会ニ出ルヨシ、私モ濃茶ノ飲ミ様位ハ知リタケレバ願ヒタシトイフニ、椏翁頭ヲフリ、アレハ文盲茶ノ湯阿房舞トイフテ、学者ノ致スコトデナシ。夫故掛物ナドモ茶向キトテ一ツ別ナリ。書画トモニチト六ケシイモノハ向カズ。書ハ大徳寺ノ和尚ノ無一物ノ三字一行、或ハ五字一行ナドトテ、誰レデモ読メル字デナケレバ価貴カラズ、夫故ニ茶人ハ多ク偽物ヲ背負コム也。一休ノ真筆ニテモ字数ガ多ク三四行ダト価廉ナリ、トカク寿ノ字カ福ノ字アルハ格外ノ高価ニ売レル、タトヘバ不老不死トイフ語ニテモ一ノ死ノ字アレバ買人ナシ。画モ人物ハ布袋福禄寿、草木ハ竹カ菊位ノ物ヲ以テ上等トス。ケ様ナ仲間ニ入ルハ学者ノ堪ヘザルコトナレバ、決シテナリマセヌトテ断ラレタリ。茶ノ湯ハ伝来ノ事故、定会ヲ立テ置ケドモ、学者ノ為スマジキコトニテ無学者流ノ為スコトト究メラレタルハ一見識ナリ。平生百費ヲ省テ万巻楼ヲ造ルノ意ヲ失ナハズ。夫故ニ読書ニテ訪フトキハ炒米湯ヲ出スノミナリ。（炒米湯ハコメユニテ、白米ヲコゲルホド焙リソレヲ麦湯ノ如ク煮出シテ飲ムナリ。其味甘香ニシテ麦湯ノ右ニ出ヅ。白米ヲカクナシテノムハ甚シキオゴリノヤウナレトモ然ラズ。麦ハソノ煮出シガラハ捨ネバナラズ。米ハ米湯ノ末、其煮出シハ少シノ焼塩ニテモ入レバ食シテ味佳ナリ。カクマデニ心ヲ用テオゴリニ見エテ実ハ倹ナルコトヲナス。）病用ハ勿論、其他ノ事ニテ訪フトキハ素焼ノ泡茶瓶ニ上茶ヲ入レ、古染付ノ祥瑞模様ノ皿ニ三種ノ干菓子（有平黄打物赤掛物白ノ三種也）ヲ定式トス。カク倹素ヲ守リ、無用ノ事ニハ金ヲ費サズ、有用ノコトニハ容易ニ出ス。サレド茶器モ書籍モ精監ノ見アルコト故ニ、多クハ俗ニ所云ホリダシモノナリ。[2]

先代からひきついだ箕裘の業は、家業はもとより、自分の嗜好に叶わない茶の湯さえも、廃絶することはしない。その一方で、古版・旧鈔を大金を投じて購うのは、家業とは全く無関係の、自分一個の趣味である学問のためである。それ故、日常生活のうち自己自身に関する範囲、および指向を同じくする枳園ら考証学者との学問的な交流においては、無用の費えを省き、倹約につとめる。さらに枳園が普段、学問以外の用事で訪問する時には、茶の湯でもなく、炒米湯でもなく、上茶で饗した。この飲料の区別が意味するものは、椀斎が学問の領域を、即ち「個」の領域を、生活の中から峻別しようとしたことである。また学問の交わりにおいて、社会的身分秩序を離れた、対等の関係を企望したことである。

すでに荻生徂徠においても、学問とは「公儀ノ勤トハ違テ、畢竟内証事」（『政談』巻之四）とされており、学問が個人の私的な領域に属するものであるという考え自体は目新しいものではない。しかし徂徠自体にとって学問とは、「先王之道」を学ぶことであり、その故智に依った当代の制度の建てかえという国家に有用のものであって、一個人の趣味の領域に止まるものではなかった。一般の幕臣に対しても徂徠は学問の必要性を説いているが、学問によって各幕臣が善良な支配階級の構成員となること（「詩書礼楽、足以造士」『辨名』学、一則）にその主意はあった。椀斎が「個」の能力と責任において、自発的に自分の趣味嗜好の充足のためだけに学問をしたのとは、大きく異なるのである。

このように、学問が何のためにという目的意識に煩わされることなく、各人の趣味の領域に位置づけられることによって、他方において歌舞音曲を娯楽として楽しむことも可能となった。またこれによって初めて、江戸時代の学問は実証性を獲得することができたといえる。

注

（1）石原明氏旧蔵。

（2）森枳園自筆『枳園随筆』（青裳堂書店・書誌学月報・別冊5、一九九七年一〇月）。

（3）『稲川先生質疑』および『鞍笞稲川質問書』（三村竹清旧蔵、二松学舎大学図書館所蔵）。

（4）安西安周旧蔵の森枳園宛書簡類のうちの一通で、矢数道明氏現蔵。当該書簡については、先に拙稿「伊沢柏軒書簡（嘉永元年二月二十九日）の周囲」（岩波書店『季刊文学』第七巻三号、一九九六年七月）で詳解した。

（5）市野迷庵（慶応義塾大学斯道文庫所蔵・森枳園旧蔵『迷庵遺稿』、『日本芸林叢書』に「迷庵雑記」として部分的に所収）が次のように言っている。

孔子、沮・溺カ異同ヲ論ズルニ、一分ヲスグルト救世ト二ツナリ。一分ヲスグルハ人間誰々モセネバナラヌコトナリ。救世ハ分外ノコトナリ。為ス人ハナスベシ、不為サ人ハナサヾルベシ。且所謂天命ト云モノアリテ、如何ヤウニ世ガスクイタイト云ト、ナラヌ人ニハナラヌナリ。コレヲ強テ行ハントナラバ、孔子ノ如ク一生マゴツキテ世ニモトムルコトヲ免レズ。沮・溺ガ一分ヲスクル了簡ガマシカト思フガ、又水飲百姓ニナラフヨリ貧乏儒者カ楽ジヤカシラヌ。

文政五年壬午三月十六日　迷莽

「救世」を我が任とせず、「一分ヲスグル」ことに安住することが、彼ら考証学者に通底する基本的な姿勢であったと言えよう。

（6）『宝生大夫勧進能一件留』（国立国会図書館旧幕府引継書類）。『勧進能見物記』（『能楽』六巻一号に翻刻所収）。『勧進能絵巻』（静嘉堂文庫所蔵・斎藤月岑自筆本のほか数本）。なお弘化勧進能に関しては川瀬一馬氏の「弘化の勧進能に就いて」（『日本書誌学之研究』所収）に詳しい。

（7）渋江抽斎書入『宝生大夫一代勧進能番組』（森枳園旧蔵、のちに安田文庫所蔵、『宝生』一六巻六号「宝生紫雪追善誌」に翻刻所収）。

（8）抽斎自筆本は徳富蘇峯旧蔵にかかり、成簀堂文庫現蔵。抽斎の長子矢嶋優善編『卓説集纜』（国立国会図書館所蔵）にも収められている。

（9）澁江保『森枳園伝』（東京大学総合図書館鷗外文庫所蔵）による。
（10）前記（5）に引く『迷庵遺稿』による。
（11）みすず書房『荻生徂徠全集』第一巻による。
（12）みすず書房『荻生徂徠全集』第十八巻による。
（13）川瀬一馬『日本書誌学之研究』（講談社、一九七一年）所収「森立之・約之父子」八一五頁。
（14）『江戸人とユートピア』（朝日新聞社・朝日選書七八、一九七七年）「偽証と仮託――古代学者の遊び――」。
（15）小山田与清『松屋筆記』に晩年の北山が芝居の金主をしたことが見える。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所　医史学研究部）

The Development of Scholarship in the *Igakkan* (3):

The Place of Evidential Scholarship in Late Tokugawa Japan

by Senjurô MACHI

The *Igakkan*, with the authority and protection given by its position as a government school, formed an academic lineage (*gakutô* 学統) based on master-disciple relationships. However, the scholars of the *Igakkan* actively interacted with outside scholars such as Ichino Meian 市野迷庵 and Kariya Ekisai 狩谷棭斎. Thus, we cannot understand the nature of *Igakkan* scholarship based only on an analysis of the official school system. Thus, I discuss how the scholarship of the *Igakkan* intersected with urban culture of Edo, which flourished from the mid to late Tokugawa period. I use unpublished letters written by evidential scholars such as Shibue Chûsai 渋江抽斎 and Izawa Hakuken 伊沢柏軒 as my main sources.